

---

# とある性転の幻想殺し少女(イマジンプレイカーガール)

橘天龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある性転の幻想殺し少女イマジンブレイカーガール

### 【NNコード】

N7582S

### 【作者名】

橘天龍

### 【あらすじ】

わたくしこと上条当麻は人生最大の不幸を味わっていた…

以外とありそうであまりなかつた上条さん性転換の作品です。性転換要素がお嫌いなたは、プラウザバックをお願いします m( )

m

## 第一話・【性転換】（前書き）

そういえば上條さんが女の子になる話ってあまりないな…と思つて妄想と勢い全開で書きました。

まあ、上條さんはイマジンブレイカーがありますからね

魔術や超能力での性転換は理論上ないですからね

学園都市…それは人口230万人中そのほとんどが学生で構成された都市である。

ここでは普通の学生としての勉学とともに、能力開発というカリキュラムが設けてあり…それは所謂超能力と言われる力である

そのせいかこの地では不思議なことが多々あり、わたくしこと上条当麻も例外ではない。…というか俺の場合は主に悪い意味での不思議が多いのだが。

かくいう今もその不思議に会っているわけで…

「不幸だ…」

そう。わたくしこと上条当麻は女の子になっていた。

しかも俺の担任…月詠小萌先生（見た目小学生の大人）と同じくらいいの目線といったおまけ付きだ。

どうでもいいが今の俺の声は某魔法少女の主人公のライバル…金髪ツインテールの子に似ていたり。

「っていうかこれじゃあ学校行けないじゃないか…もうすぐ夏休みだつてえのに…不幸だ」

と、今や口癖になつてゐる言葉を吐いた直後

？？？「カミやーん！一緒にガツコ行くぜ…よ？」

まさに計つたようなタイミングで俺の悪友の1人、土御門元春が表れた。そして固まる土御門。頭を抱えた状態で固まる俺。

わたくしこと上条当麻は性別が変わってしまい、それを知人に目撃されるという、人生最大の不幸をまさに味わっていた

ふ、不幸だああー！

続く

## 第2話・【混乱】（前書き）

2話目の投稿です。何とか早めにできました

土御門の口調難しい…

## 第2話・【混乱】

「んにちは上条当麻です。わたくしは絶賛不幸邁進中であります朝起きたら女の子になつてた。しかも担任の小萌先生と同じくらいの目線、加えてなぜか銀髪（しかもかなり長い）。それだけでも不幸だつてのに

土御門「キミは誰なのかにゃー？」

こんな時に限つて何故か登校のお誘いにいらつしゃつた、悪友の1人、土御門元春とエンカウントを果たすという不幸つぱり。

これまでの人生で最大の不幸ではなかろうか…

「不幸だ…」

土御門「！？」

思わず呟いていたいつもの中癖。それがどこか幼い子供と話すような表情（たぶん妹の舞夏と同じだろう。ふ、不幸だ…）だった土御門が一変した

土御門「…もしかしてカミやん…なのか…？」

驚愕した表情で恐る恐る尋ねる土御門。そりやあ信じられないわな。俺だつて先日知り合つた常磐台の…名前なんだつけか…その子がいきなり男になつてたら信じ…（妄想中）…いや、案外合つてるかも…

土御門「……違ひ……のか……？」

俺が思考と妄想の狭間をた迷つてたら、否定と見たのか土御門が再度尋ねてきた。

「信じてくれる……のか？」

俺は某魔法少女のライバルばかりのロリボイス全開で聞き返した。

土御門「いや……まだその特徴的な口癖を言つたから疑問に感じただけだ。……本当にカミやんなのか？」

「嘘みたいな話だけど本当だ。俺は上条当麻だよ」

土御門がみたび尋ねたので今度ははつきり答える。すると土御門は何か思い立つたのか否か、複雑な表情をした

土御門「……（そんなバカな……上条当麻にはイマジンブレイカーがある。魔術や超能力……それに準ずる異能の力は効かないはずだが……）すると……」

何やら土御門がブツブツ呟いているが俺には全く聞こえなかつた

俺が口リボイス全開で声を掛けてみる。あ、今ビクッとした。

「おーい、土御門ー？」

土御門「な、何かにやー？カミやん？」

「信じてくれる……のか？」

俺が恐る恐る見上げて尋ねた

土御門「…（う、今のカミやん可愛いぜよ…）人目の妹にしたいく  
らいに…）何言つてるんだ」やー 俺はカミやんの親友せよ？当た  
り前だにやー」

土御門がいつもの二ヒルな笑みを浮かべる。あ、なんか涙出そう

土御門「なあ、カミやん。悪いけど俺ちょっとヤボ用があったの忘  
れてたぜよ。だからこのことは小萌せんせに相談したほうがいいん  
じやないかにやー？」

「え、ちゅ、土御門？」

急な展開に付いていけずにわたわたと混乱していると土御門が俺の  
頭にポンッと右手を置く。…あ、何か安心する。

土御門「大丈夫！小萌せんせは【学園都市】の先生ぜよ？」  
不思議事態にもちゃんと対応してくれると思つてやー」

思つかぬ

またしかにこんな事態になつても小萌先生なら相談にのってくれ  
るかも。どうにかしてこのままじや学校はあいか、生活もままな  
らないし…

土御門「ど、そうだ。そのままじや外出歩けないんじやないかにや  
ー？」と、とりあえずこれを進呈するぜよ。ああ、お礼なんていらないに  
やー。今度それ着たのを見てくれれば充分ぜよ。それじや…」

土御門は外出に不便だらうと白い箱（どこから取り出したんだか…）を押しつけ、矢継ぎ早に捲し立てるとなつたと出でていった。

「なんなんだあいつ。…まあ、今の俺はダブダブのTシャツと短パンだけだし…お言葉に甘えるか」

そう自分で自分を納得させて箱を開けてみる

「……………は？」

中にはメイド服が入っていた。しかも身に付ける下着も。当然女物。  
…ああ、そうか…妹の舞夏ちゃんの替えか何かか…

「ふ…不幸だあああーーー！」

既に人気のない男子寮に某吸血鬼ヒロイン（表）ぱりのロリボイス  
が響き渡つた

続く

## 第2話・【混乱】（後書き）

今回の上條さんの不幸…土御門とのHンカウント・メイド服の進呈・ダブダブの男物の服を着た痴態を見られる（上條さんに自覚なし）

### 第3話・【接触】(前書き)

今回は土御門視点です。

上条さんには出ません ( ) m

### 第3話・【接触】

土御門 S·i·d·e

俺は奴に真意を確かめるべく、奴がいる部屋にきた。

「…アレイスター」

俺が巨大な試験管のような物に入つた逆さまに漂う人物に声を掛ける

アレイスター『…土御門か。一体何用かな?』

奴はいつも通りの無表情で尋ねる

「はっ、知ってるんだろう?…上条当麻のことだよ」

アレイスター『…ふむ。彼にはこれから色々役立つてもらわないと  
いけないのだが…少々面倒なことになりそうだ』

無表情で淡々と話すアレイスター。ちつ、よくもぬけぬけと

アレイスター『…何か勘違いしているようだな。今回の件には私は  
関与していない』

なん…だと…?

土御門「そんなバカな!上条当麻にはイマジンブレイカーがある!…  
あれが有る限り魔術や超能力は効きはしない!…あとは科学だらうつ

!』

俺は堪りかねて殴り掛からんばかりの勢いで反論する。『冗談じゃない、科学じゃないといつたら何が影響なんだ！』

アレイスター『…少し落ち着きたまえ、土御門元春。とにかく今回の件には私は関与していない。私とて大幅なシナリオの変更をせざるを得なくなつて辟易しているのだ』

「あつ、そつか…奴にとつても【今回の件】はイレギュラーだったといつてとか。

アレイスター『…イレギュラーはあつたが根本的な修正は必要ないと判断している。キミには引き続き【彼女】の監視を頼む』

彼女、ね。奴の中では上条当麻は本当に【女】として認識したらしい。

「任せらんんだこやー。俺はそいつのせ得意せよ。んじや、そろそろ時間だから帰るぜよ~。」

俺は迎えに来ていたテレポーターの力で”窓も出口もない部屋”を後にした。

去り際に奴が微笑を浮かべたような気がしたが部屋を出る頃にはすっかり忘れていた

Side on t

続く

### 第3話・【接触】（後書き）

ホントに土御門の口調は難しい…あとアレイスターも。

作者自身がアニメと原作三巻までの知識しかないので、アレイスター  
いや土御門の口調が可笑しいかもせんがどうかご容赦下さい

m(—)m

## 第4話・【体験】（前書き）

ようやくお待たせしました m ( ) m

## 第4話・【体験】

「こんにちは、上条当麻です。前回と同じくだりなのは恥辱で身投げしたいくらいだからです、ハイ。

現在の俺はメイド服に身を包んで学園都市を闊歩してある人の家に向かっている。先ほど土御門から助言を受けたとおり、その人に今後の相談をするためだ。

とはいえ…やはり恥ずかしい…今の俺は銀髪ロリメイドなのである。それこそこんな現場を青髪ピアスに見られたらと思つと…（想像中）…恐ろしい！確実に貞操の危機だああ！

……ただ、この学園都市には何故か【メイド養成学校】なるものが存在している。それ故かメイド服着た学生はある程度珍しくはあるが、可笑しなものではないらしい。

それでも目立つのは俺の容姿のせいだろう

腰まで伸びる艶やかな銀髪（メイド服着るときにわかつた）、大きな青い瞳（洗面所の鏡で確認）、小萌先生よりは高くてビリビリ中学生よりは低い背丈（舞夏ちゃんの替えの服なのにほぼピッタリ）

……

そつちの趣味の人ならまさしくストライクだろう。

……不幸だ…

？？「おい、そつちは区域外だぞ。」

と、深い恥辱の極みに達しそうになつたときに唐突に声を掛けられる。

しかも相手はあの土御門の妹、舞夏ちゃんだった

舞夏「ん？お前見かけない顔だな。新入生…もしくは留学生か？」

…まずい。どう答える？

『「俺はお兄さんの友人の上条当麻だ」…いやいや見た目が違うすぎる、変な女と思われかねん

…どうしよう。上条さん泣いてもいいかな？

舞夏「む…外国人だから言葉が話せないのか？…まあいい。私は土御門舞夏、お前と、同じ、メイド養成学校の、生徒だ」

ひたすら思考のドツボにハマつてると、舞夏ちゃんは言葉が話せないと思つたのかオーバーなボディーランゲージで自己紹介してきた

…よし、それなら好都合。舞夏ちゃんには悪いがこには日本語が話せない外国人美幼女（皿皿皿贊）を演じさせてもらおつ

「……（口クヨ）」

黙つて頷くと、舞夏ちゃんはふむ…と納得したような表情に変わる

舞夏「言葉は理解出来るみたいだな、なら問題はないだろつ。行くぞ」

「…ひー？」

急に手を引っ張られた為に思わず声を上げそうになるがグッと堪え、その場に踏み留まる

舞夏「どうしたんだ？今回の実地研修はペアじゃないとダメなんだ。だからお前がいないと私は出られない。だから来い」

「～～～」

声に出しそうになるのを必死に堪えながら俺は舞夏ちゃんと無理矢理連れていかれた…不幸だ…

…それからあつといつ間（俺はものすごく長く感じたが）に夕方。

もうそれこそ1日で1週間分くらいの体力を消耗した気がする…

メイドさんって大変なんだなあ…

舞夏「まあ、留学生で新入生ならあのくらいいいだろ？」

それから俺は舞夏ちゃんと連れ立つてメイド養成学校へ戻る途中である

なんとか抜け出さないと…学校に着いたら部外者だとバレてしまつ。でも俺は日本語が話せない無口美幼女（自画自贊）だ。適当な理由を話す以前に話せない…と、再び思考のドツボにハマつてると、前方から見慣れた金髪ツンツン頭に青いグラサン男。

土御門「 ものつかマイスター 」

舞夏「 おおー・お兄様！ 」

土御門の登場に田を輝かせる舞夏ちゃん。兄妹で仲の良さぶりで

土御門「 今帰りかにやー？ 」

舞夏「 うむ、兄上様。今日は第7学区の西方面でなー 」

と、舞夏ちゃんが今日の実地研修の出来事を楽しげに話しだした。  
土御門も相づりを返しながら「 いやいや 」と。コノヤコノウ

土御門「 んで、その子は誰かにやー？ 」

舞夏「 うむ、留学生で新入生だ。名前はわからん、言葉が話せない  
らじへてな 」

土御門がほつ…と何か言いたげに「 いや」と一瞬笑った。…コノヤ  
ロウ…絶対楽しんでやがる

土御門「 ん？ あやここののは青髪アスジやないかにやー？ 」

なにい！？

青髪「 ん？ 土御門やないか。やつこやめ今日カ///やん来てへんかった  
けど土御門はしこん？」

土御門「 …こや、俺も知らないにやー 」

やばこ…見つかる前に逃げなくては…

青髪「おおおー銀髪ロリメイドキターーーー！」

終わつた

人生の終わりを迎えたと言わんばかりの表情で何んなりしてると舞  
夏ちゃんが話しに割つて入る。

「やめに語葉に語せがしり  
得て口和の邊に立木の間生力  
しいぞ」

青髪「ふうん、 そうなんか… まじねーむ、 いす、 ぴあす、 あおがみ  
ー」

いやいや、それあだ名だろ……俺が不審者を見るような眼差しを向ける

青髪一 おお、通じたで！ 僕の英語力も捨てたもんじやないな

英國人に失礼だ

」  
. . .  
#」

なんかムカついたので無言で蹴りをいた（しかも弁慶の泣き所）

青髪「あばあ！いやいや、今のは名前！自己紹介しただけやつて！」

舞夏「あはは、もしかして『蹴ってくれ』と解釈したんじゃないのか？」

2人は変に解釈したのだと感じ青髪は涙目、舞夏ちゃんは可笑しそうに笑った。

ただ土御門だけは事情を知つてるので黙つてニヤニヤしていた

青髪「えと、名前ー俺は、ピアス、青髪やー」

だからそれあだ名だらうが

再び無言で蹴りを入れてみる。しかも金的に

青髪「うばああー……け、蹴つて…くれ…ちゃう…じい…しようかい…しただけ…や…」

そのままくの字に折れ曲がつて前のめりに倒れる青髪。

なんかすつきりしたよ、上条さんは

土御門「(カミ)やんカミやん、小萌せんせの所には行つたのかにや~?」

舞夏ちゃんが尻を突き出して突つ伏す青髪をシンシンしている隙をついて小声で話しかけてきた…つてやばー…

土御門「(その表情はまだ行つてないつてことかにや~?舞夏には誤魔化しどくからカミやんは行つたほうがいいですたー)」

「(……すまん、あと頼む)」

おどけた口調ながらも気遣つてくる土御門に礼を言つて駆け出す。  
後ろで「由や！」とか聞こえた気がしたが無視だ

\* \* \* \*

それから歩くこと数10分。小萌先生の住むアパートにたどり着く。

今後のこともあるし、相談…

？？「あれれ～…ひはメイドさんの出張サービスは依頼しないで  
すよ～」

しょうと考へてみると聞き覚えのある口リボイス。

振り返るとやはり見覚えのある口リつ娘…月詠小萌先生がお酒ビールが入  
ったビニール袋を携えて立っていた

続く

## 第4話・【体験】（後書き）

今回の上條さんの不幸…土御門舞夏にメイド研修を受けさせられる（夕方まで）、青髪ピアスにメイド服姿を田撲＆下着を見られる

## 第5話・【危機】（前書き）

みづやく書き上がりました

誠に申し訳ありません…

## 第5話・【危機】

小萌「あのー、メイドちやん?」

我が担任様が僅かに上目遣いで見上げながら顔を傾ける。

「いえ、お…私はメイドではなくて」

小萌「でもメイド服着てますよ?」

確かに今の俺は銀髪ロリメイドだ。それはまあれもない事実だ

小萌「ん…なにか事情があるみたいですし、立ち話もなんだから入るですか?」

小萌先生が古ぼけたアパートの一室(先生の自宅らしい)を指差しながら言つ。

「えと…お願いできますか?」

小萌「はいです、いつも見えてるわたしは先生なんですから、生徒さんの悩みを聞くのも仕事のうちですよ」

相変わらずの人懐っこい笑顔を向けながら自宅の鍵を開けて中へ案内して下さる我が担任さま。

「お、お邪魔します…」

小萌「はい、どうです？」

先生の部屋の中は…まるで中年教師のような薄汚い佇まいだった。部屋中の至るところに点在する空き缶銀色シルバーの丸い灰皿に山のようこ詰まつた吸いがら、酒のつまみにしたのか空き缶と同じじょうに珍味の空袋も転がっていた。

小萌「あわわ、あんまり部屋を見渡したら恥ずかしいですよ」

確かにこれは恥ずかしいわな…

小萌「オホン…それでメイドちゃんは何がお悩みなんですか?」

小萌先生がやや顔を赤面させながら咳払いし、用件を切り出した

「ええと…先生は突発性の性転換つてわかりますか?」

俺は緊張した面もちで尋ねる

小萌「突発性…それは薬の服用や能力で、ですか?」

小萌先生は笑い飛ばすでもなく真面目に問い合わせてきた。表情も見えた目に反した学園都市の教師のそれに変わっている。

「薬はわかりませんが…能力つてことはないと思います」

そう言ってからすっかり華奢になってしまった自らの右手を一瞥する。

俺には特別な力がある。それは異能のものならどんな力でも無力化できる右手が。

幻想殺し（イマジンブレイカー）。それが俺の力だ  
この姿になつてから試していいが、能力によるものなら一切効かないはずだ

小萌「うーん…能力ならチエンジセクシャル、薬なら第8学区で研究されていた性別を転換させるのがあるですが…でもそれがメイドちゃんの悩みと関係あるですか？」

「…………俺がその突発性の性転換した者だと言つたら、信じてくれますか？」

小萌先生が俺の発言に目を丸くする。まあ、普通は驚くわな

小萌「それじゃあ…あなたは男の生徒さんなんですか？」

小萌先生の神妙な表情を向けてきた。俺も真面目な表情をして頷く。  
そして――

「俺は上条当麻ですよ、小萌先生」

ハツキリと正体を告げた

小萌「ふえ？ 上条ちゃん？…………ええええー？」

俺の発言に小萌先生がきつちり10秒ほど硬直し、その後に部屋の外まで響きわたるような大きな声で驚愕した

……先生の口リボイスでの絶叫はキツい……

小萌「なんで?...どうして上条ちゃんが?！」

さつさつよりも声が小さくなつたが、それでも大きめの声で尋ねながら身を乗り出して聞き返してきた

「ちよ、先生、顔が近いです」

小萌「あわわ、失礼しましたです」

俺の言葉にハツと我に返つて先ほどの位置に戻る。それから再び咳払いをして落ち着いてから真剣な目を向ける

小萌「それで…なんで上条ちゃんが女の子になつてるですか?見た目が面影は全くないですよ?」

「それが俺にもさつぱりなんですよ…朝起きたらこんな姿になつてまして」

不幸だ…と呟き、ため息をつぐ。本当にわけがわからない…

小萌「いきなり上条ちゃんがなんの連絡もなく休むから心配してたのですが、そういう理由だったのですか」

「面倒なことですか…」

申し訳なく頃垂れる。土御門の奴…適当な理由を作つて云ふてくれなかつたのか

小萌「それにしておかしいですね？チョンジセクシャルは能力者自身限定だから他人を性転換できないですし、それに…」

小萌先生が再び学園都市の教師の表情になつて考察する

「じゃあ薬ですか？」

俺の言葉に先生はゆっくり首を左右に振る。

小萌「それはあり得ないです。第8学区の薬はまだ研究段階でラットへの投与までなんですよ。それも成功例はかなり稀でして…大半は遺伝子異常で死に絶えてるです。だから上条ちゃんみたいに人間に投与して成功する確率はほとんどゼロなんですよ」

小萌先生が悲痛な表情で答える。たとえ実験用のラットでも生き物の生き死には悲しいようだ。心優しい小萌先生に穏やかな気持ちになる。

「…」

半ば諦めの入った声色で尋ねると

小萌「今は手段がありませんが、大丈夫！上条ちゃんが元に戻れる方法をきっと見つけだしますよ…」

俺を気遣つてか一ツ「」と優しげな笑顔を向けた。

不覚にも泣きそうになつた。…まことに、幼文化してから情緒不安定になつていたようだ

「先生……グス……」

小萌「仕方ありませんよね、こんな事態になつては誰でも不安になりますよ」

遂には堪えきれなくなつて泣きじゅぐり俺を先生は優しく抱きしめてあやしてくれた

うう……不幸だ……グス……

続く

今回の上條さんの不幸……トボのアーティストがおじやへる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7582s/>

---

とある性転の幻想殺し少女(イマジンブレイカーガール)

2011年7月21日12時36分発行